

連載

# ニワトリの獣医師と呼ばれて12

～一懸命から一生懸命へ～



白田 一敏

## 雷鳥のフンを探せ!!

「白田君。至急会いたい!! Dr.H」

ある日、筆者の机の上には研究室の誰もが恐れるH教授からのメッセージが貼られていた。わが研究室では朝の始業時間は決まっていたが、講義や実習の都合や研究室内の実験スペースの都合で各々すれ違うことが多い。したがって、同じ研究室に在籍していても顔を会わさないこともあるわけだ。そのため学生へ指示を傳達したい時、H教授はこのメッセージを書いた名刺大の大きさのメモを使うのが慣わしだった。このメモをいただいた後は仕事が急激に増えるので、学生たちはしばらくパニックとなる。

筆者は研究室内のすれ違いを巧みに利用して時々実験室を抜け出し、息抜きにサッカーやマージャンに興じていたのだ。しかし、そんな時に限ってこのメモをもらったものだ。

「ゲッ! コレ、いつから貼ってあるの?」研究室に戻ると、  
「フフフ。昨日の夜からさ」と意地悪く笑う同期S君。

「H先生が探していたよ」と同期のKさん。

「本当かよ。早く連絡してくれよ」  
「連絡したけど不在だったわ。何処で油売っていたの」とS美。

幸か不幸かわからないが、当時は携帯電話やメールといった大変便利な通信手段が現在ほど普及していなかったので、時々他人から全く束縛されない空白の時間を作ることにはできた。

至福の時間の後は、当然のことながら辻褃を合わせねばならない。

「仕方がない。覚悟して行くか」としつこくH教授の部屋をノックした。研究室に在籍していた頃は、このような場面は多々あったものだ。さて、その時のH教授からの指令は「雷鳥のフンを探せ!」というものであった。予想に反して比較的簡単にクリアできそうな指示だったので、筆者はつい安請け合ひしてしまった。のちに大変なことが待ち受けていようとは知る由もない。

研究室の主力となる学年になった時、ニワトリの獣医師を目指して

た筆者はフィールドに直結した研究テーマのように思えたガンボロ病(IBDV)に関する研究に携わると勝手に思い込んでいた。ところが蓋を開けると、H教授が予算申請していた「中部山岳地帯における野生動物の生態に関する研究」というテーマに国から莫大な研究費が付与されることになり、新たな研究テーマに取り掛かることを余儀なくされたのだ。

新たな研究を開始する時は、研究材料の収集から始まるのが常だ。テーマが野生動物の生態の研究であるから、市町村で実施される有害動物駆除作業などにより捕獲された野生動物(サル、タヌキ、キツネ、ニウトリア、ならびにカラス、カモなどの野鳥)を先生と一緒に引き取りに行くこと(採材)が第一の仕事となる。検体はすでに死亡した動物もあったが、麻酔により生きたまま大学に運ばれる動物も多かった。そんな時は、心臓採血にて安楽死させ各臓器を採材した。

材料を潤沢に採取するには、地元狩猟家の協力や他で活動している野生動物研究チームとの交流が不可欠となる。その一環として、雷鳥の

生息調査する研究グループと行動をともにすることになり、わが研究室（獣医学科）の代表として筆者に白羽の矢が立ったわけだ。

それにしても、言葉足らずのH教授に、脳気な筆者。雷鳥のフンを採取するのに、アイゼン（登山靴の底に装着する滑り止め）やピッケル（氷を割る杖のようなもの）を何故準備しなければならぬのだろうと軽い疑問を抱きつつも、『何とかなさ!!』といった気持ちだった。

雷鳥の生息調査実施日の前夜、出発前の懇親会が催された。調査隊の面々と歓談したところ、筆者の軽い気持ちに吹っ飛ばすほど本格的な調査であることが判明した。それらは、山開き前で雪溪の残る山へ入山すること、無人の山小屋を拠点として十日間泊り込みで調査すること、加えて調査メンバーはヒマラヤ登山経験者を含む精鋭部隊というものであった。

雷鳥はヒトとの関わりが極端に少ない高山に生息する。そのため、ヒトとの接点が少ない山岳地帯に山開き前の時期に行くことが最適なのだ。つまり、豊富な登山経験が必要なことともうなずける。

しかし、今更後に引けなかったの自分なりに覚悟を決めたのだが、なんせ登山に関して知識を全く持ち合わせていない。案の定、大苦戦を強いられた。苦戦の始まりは、懇親会で飲み過ぎてしまったことだ。体育会系の雰囲気があったわが研究室では勧められたお酒は簡単に断ることはできない。しかし、そこは高い山の上。低所と異なり飲んだアルコールは体内で直ぐに分解されない。翌朝、いわゆる二日酔い状態となつてしまったのであった。

その上悪天候の中、登山靴やゴアテックス（撥水性や通気性が非常に優れた素材）製の雨具などの本格的な装備を備えていなかったことや、慣れないアイゼンを履いて雪溪を歩くことにより、体力を消耗し切ってしまったのだ。

本来の目的である「雷鳥のフンを採す」ことは、雷鳥の習性を知っていれば比較的容易であったが体力は限界だった。精神的にも油断すると「死」と隣合せであることを実感し、神経が磨り減った。それでも何とか最初の五日間は持ち堪えた。しかし、六日目にはとうとうダウン。仕方がなく、筆者は一人で山小屋

に残り一日休息を取ることになった。前日まで毎日風雨の中で調査を続けなければならなかったのだが、そんな日にかぎって晴天であった。山小屋の外に出て見ると、澄み切った空気の中に三六〇度見渡す限りの絶景が広がっていた。別世界とはまさにこのことだ。この光景が筆者の疲れきった肉体と精神をリフレッシュしてくれたことを今も忘れない。紆余曲折がありながらも、わが研究室では多種多様な野生動物由来の

## 若くして帯状発疹

臓器ならびに血清を多数入手することができた。その中で、カモ、カラス、ハトならびに雷鳥などの野鳥からインフルエンザウイルスの分離を試み、数株ではあるが分離に成功したことは先述した。

結局ニワトリを直接取り扱う研究は自分自身のテーマとして有するところができなかったが、当時に流した汗は血肉となつていて、当時を感懐し、その環境を与えて下さったことに感謝している。

生活費を含めた大学に関わるすべてのコストを筆者自身稼ぎ出さなくてはならない境遇であったので、講義や実習の間隙を利用してアルバイトをせざるを得なかった。主な収入源は以前本編で紹介した家庭教師であったが、授業料までは捻出できなかった。したがって、週に数回は真夜中に居酒屋で夕食付きのバイトをすることにした。この仕事は家庭教師に比べれば時給が悪いので長時間働かなければまとまった収入にならない。そんな訳で深夜三時過ぎまで働くこともしばしばだった。

こうした生活が数年続いた。きつと無理し過ぎたのだろう。筆者は若くして帯状発疹という疾患を患ってしまった。この疾患はヒトの知覚神経に潜伏するヘルペスウイルスが原因で、ほとんどのヒトが保有しているものらしい。しかし、大抵は極端に抵抗力の落ちたお年寄りが発症するケースが多いとのこと。一昔前は発疹が身体を一回りしたら死亡すると言われたそうだ。ウイルスが体全体に張り巡らされている知覚神経で大暴れするのだから、神経叢に従って尋常でない激痛が走る。本当に自

由に身体を動かさないのだ。

激痛で顔を歪めながら廊下を老人のように歩いていると、

「どうしたの？ 何かの冗談か？」と研究室の学生たち。

「どうやら帯状発疹になったらしい」

「本当かい。原因はヘルペスウイルスか？」

「そうらしい。背中に水泡が沢山あるよ」

「そうか!! 背中を見せてくれ。ウイルス分離してみようぜ!!」と目

をキラキラ輝かせる学生たち。

「ヨッシャ!! タイミング良くウイルス分離用の培養細胞があるよ」と筆者の様態とは無関係に学生間でトントン拍子に話が進んでいったものだ。

「おいおい、もっと別の心配してくれよ」

体調不良の原因が判った安堵感と研究室の和やかな雰囲気は筆者の心の中に複雑に入り混じった当時の気持ちを思い出すと懐かしい。

## ダシ巻き玉子焼

話は戻るが、深夜までアルバイトしても講義や実習の合間の時間は限られているので、当時の国立大学の授業料(年間三〇万円)を稼ぎ出すことは難しかった。冷静に考えると、現在でも親から経済的に独立した生活を営む若い世代において、賞与以外に日々の生活費から年間三〇万円という金額をキャッシュフローでできる人はそう多くないはずだから、当たり前前といえば当たり前なのだが。

授業料の支払いには、どう工面しても数万円足りない。打開策は、年

末の一週間だけ玉子焼職人に変身し短期間で稼ぐことであった。スパルタ研究室で名高いわが研究室でもさすがに年末年始の休暇はあったので、実家に帰ったことにすれば何のお咎めもなくアルバイトに励むことができた。

玉子焼職人のバイトとは、麻雀仲間であった獣医学科の助教授(当時)の実家が名古屋駅近くのアーケード内市場で玉子焼き屋を営んでおられ、仕事を手伝えば一日一万円から一万二〇〇〇円のバイト料をいた

だけるといふものである。一週間で七、八万円を一気に稼げるというところで筆者にとつて願ってもないバイトだった。

このアルバイトは効率的に稼げるので希望者が多そうな仕事だが、我々の世代の学生には全く人気がなかった。世の中そんなに甘いわけはなく、若者がやりたがらない理由があった。

それらは六畳ほどのタコ部屋に五、六人同部屋となり万年布団で寝ること。風呂は銭湯。十二時間労働の二交代制勤務。長年の伝統で日中勤務は獣医学科担当で早朝四時起床。夜間勤務は剣道部といった具合だ。宿泊する部屋は剣道部と同じタコ部屋なので、我々は剣道部の連中が眠った汗臭い同じ布団で寝ることになるのだ(彼らも同じことを言っていたかも…)

さらに、バイトするこの一週間は太陽を拝むことができない。なぜなら店と宿泊場所はともに薄暗い市場のアーケード内にあり、朝日の昇る前から日が沈むまで「ダシ巻き玉子」を焼き続けなければならないからだ。

肝心の仕事は、ワクチン作業と同

じく極めて単調であり、十二時間ただひたすら「ダシ巻き玉子焼」を焼いた。ただし、ワクチン作業よりもいくらかマシであった。それらは、「ダシ巻き玉子」の出来上がり具合にこだわること、ならびに焼いている傍で消費者の喜ぶ顔が直接見られることであろうか。

当時は生活に必死だったため単純にバイト料に大変惹かれていたこと、ならびに視野が狭かったため、お世話になった玉子焼屋の業態構造についてあまり深く考えなかった。しかし、わが採卵業界が史上最底の

卵価である現在から改めて振り返ると、筆者がお世話になった玉子焼き屋に商売の原点を垣間見ることができそうな気がする。

それらは、①直売(ダイレクト・マーケットイング)、②固定客の獲得、③値段の自己設定が可能(粗利率の確保が可能)、④現金商売、⑤労働力の効率化(必要な時のみ人員確保)、⑥調理を見せるパフォーマンス、が挙げられると思う。

この店で我々が焼いていたダシ巻き玉子焼は、お正月用料理のひとつとして一個二五〇円から三五〇円の値段であったが飛ぶように売れていた。地元の固定客(ファン)が多かったように記憶している。

筆者は五年ほど続けたので熟練者であったのだが、焼き方の上手下手は別として初心者でも一時間で六〇個ほど焼けた。一つのダシ巻き玉子焼は一個二〇〇〜二五〇グラム前後。多くても卵三個分ぐらいの液卵とダシ(鰹節、みりん、砂糖など含む)を混ぜ合わせた材料をネタとして用いていた。

筆者の記憶を頼りにコストを推定してみると次のようになる。

◎ダシ巻き玉子焼一個二五〇円(最

低価格の製品で計算)

☆原材料費

①卵三〇個(一二円×三個〓三六円)卵を二〇〇円/キロと設定。

②ダシ用材料(推定一〇円)

☆人件費・一六・六円/個

玉子焼き六〇個/一時間×十二時間〓七二〇個/日

(日給+雑費)一・二万円÷七二〇個(個数/日)〓一六・六円/個

☆光熱費等の諸掛・五円/個

☆原価合計・六六・六円/個

☆原価率・二五%(二割以内に収まっているかも…)

☆粗利益・一八三元/個

☆生産個数・六〇個/時×六名(作業者)×二十四時〓八六四〇個

☆粗利益額・一八三元/個×八六四〇個

〇個〓一五八万円

☆お正月用玉子焼き販売営業期間・七日間

☆期間粗利益額・一五八万円×七日間

〓一一〇六万円

※店主家族労働部分は考慮せず。

※店舗の償却はないような古い建物および設備

以上筆者の推定する部分もあるが、この店は年末の一週間で少なく

とも一〇〇〇万円を超える粗利益を確保していたと推測される。

一方、わが採卵業界を振り返ってみよう。原価は各生産者の事情に様々だが、普通の原料卵を基準に計算すると原卵一キロ当たり一二五円から一七〇円の範囲に収まるであろう。

ところが、本年一月の鶏卵相場の平均は九五円(至農M基準値)であった。実際、生産者の手取り金額はこの金額から三〇円から四〇円を引いた金額になるので、五五円から六五円が売価である。

原価が一二五円から一七〇円に対して、売価が五五円から六五円。原価率どころの話ではない。原価の中で一番のウエイトを占める餌代さえ捻出できないのだ。鶏卵相場が原価率を計算できるような価格帯で推移することが正常な経済行為であるはずだ。つまり、相場は全く機能していないのだ。

業界におけるオピニオンリーダーの道義的責任の有無はともかく、基本的にこの状態を他人に責任転嫁して終わらすべきでないと思う。業界には低卵価が半年ぐらい続いて経営体質の弱い生産者が淘汰されると、

その後に高卵価が来るであろうという予測(期待)がある。だから、今は我慢比べの時期だと意見が大方だ。果たして本当にそうであろうか?

確かに一過的に息がつける期間は来るかもしれない。しかし、業界自体が搾取される側に回ると、さらに低コストで生産する競争を余儀なくされる。悪循環という泥沼にはまると、業界を取り巻く環境がさらに厳しいものになり、パイの奪い合いどころかパイ自身が小さくなる。その度に低卵価の波は何度も押し寄せて来るのではなからうか?

状況は把握していても、今までのしがらみや様々な思惑で机上の計算通りに行かないのが現実だということも筆者は承知している。しかし、一方でアクションを起こさなければ何も始まらない。

筆者が学生時代にお世話になった先の玉子焼屋が実践していたように、業界全体が商売の原点に帰り、可及的速やかにシステムの再構築がなされることを願ってやまない。(筆者・株)ピーキーシュー品質管理&生産管理部門長/獣医学博士/獣医師)